

農福連携のコーディネイト

—新潟市障がい者あぐりサポートセンターでのインタビュー—

海老田 大五郎

新潟青陵大学福祉心理学部臨床心理学科

Coordinates for Agriculture and Social Welfare Linkage:
Interview at Agri-Support Center for the Disabled People in Niigata City

Daigoro Ebita

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY FACULTY OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY
DEPARTMENT OF CLINICAL PSYCHOLOGY

要旨

キーワード

農福連携、就労支援、就農支援、国家戦略特区、コーディネーター

Abstract

Key words

agriculture-social welfare linkage, job assistance, encourage engagement in agriculture, national strategy specific district, coordinator

I はじめに

本資料は、平成28年7月7日16時より行われた、新潟市総合福祉会館1階にある新潟市障がい者あぐりサポートセンター（以下「本センター」）でのインタビューの概要である。本インタビューは、新潟市内での農家、農業法人の求人ニーズと、新潟市内の障がい者就労支援施設における施設外実習のマッチングやコーディネイトを行う本センターにて、「コーディネーターとは実際にどのような仕事をしているのか」を学ぶことを目的としていた。しかしながら、本センターの試みはコーディネーター役割を学ぶだけでは非常に惜しい、農福連携として豊富な内容であったため、本資料の公表に至った。

新潟市は「平成26年5月1日に「大規模農業の改革拠点」として国家戦略特区に指定さ

れ、高品質な農作物、全国有数の食品製造力を活かし、農業の国際競争力強化の拠点形成を目指して」¹⁾ いる。併せて、農業分野の創業、雇用拡大を支援しており、障がい分野での就農支援も期待されている。本センターの試みは、新潟市の全国トップクラスの農業力（水田耕地面積、水稲作付面積、水稲収穫量、農業就業人口がすべて全国1位）を活かした行政主導の就農支援の試みである。全国的に見ても本インタビューは貴重な資料ではないかと判断し、実名で公表することにした。本資料が貴重である理由を少し単純化して言えば、農福連携を試みたいと考えたところで農業的環境が整っていなければ、農福連携を行うことはできない。そういう意味では、新潟市の農福連携の実践は、農業的環境の不備

という要因をあまり考慮する必要が無く、農福連携のあり方そのものに焦点化して考察できるためである。実名公開に至っては、新潟市と調査協力者である本センター長の菊池雅幸氏から了承を得ている。本インタビューは2時間以上に及んでおり、全ての語りを掲載することは紙幅の関係上難しい。そのため、筆者の責任において、文意が損なわれない程度に、調査協力者の語りとして編集してあることを申し添えておく。

II インタビューの概要

1. センターの立ち上げ

新潟市障がい者あぐりサポートセンターは、農業と福祉を繋ぐ目的で、平成27年4月に開設しました。新潟市障がい福祉課からの依頼でやっております。障がいのある方の元気を農業に繋げたいということです。新潟市が現在、目指している農福連携には、2つのポイントがありまして、お互いのメリットを増幅するということと、助け合うことで生まれるネットワークを大事にしたいという、2つのキーワードがあります。人手が不足している農家さんが障がい者施設の労働力と一緒に絡みうことでお互いに助け合うことができます。

新潟市内の農業は、農繁期の瞬間的な人手不足が深刻になってます。冬は割と暇なんですけれど、春と秋だけめちゃくちゃ忙しかったりします。高齢化が進んでまして、しかも後継者がいないような農家もけっこうあります。それによって、活性化されていない。これを具体的に言うと若い農家さんは、例えば、SNSなどで販路を拡大したりとか、いろんな情報をキャッチしながら、ニーズに応じて新たな品種をつくったり、新たなお客さんを開拓したりという行動力があるんですが、なかなか70歳のおじいちゃんとおばあちゃんには難しいです。そういった「時代の流れに乗って農業で新しい展開をやってくださいよ」っ

て言ってもなかなか難しいんですよね。SNS環境を使いながら、新たなものに取り組んでいくっていうものが必要なんだけど、お年寄りにはそれができない、息子さんも農業から離れていて、継ぐ気はないとかいうことで、非常にジリ貧というか、頭打ちの状態になっているということです。

障がい者就労支援施設では、訓練の作業内容が偏っているという現実があります。箱折りをやっていたり、シールはがしをやっていたり、パソコンの分解をやっている。実際それが社会に出たときに、ちゃんとそれが役に立つかっていうとちょっとクエスチョンマークつくところです。やはりいろんな作業をすることによって、いろんな経験をして、その中のいくつか、社会に出たときに役に立つかっていいのはあるんですけど、作業に偏りがある状況です。一定以上の工賃アップが難しいということで、ある企業から受託作業で箱折りなどの内職的な仕事を施設は持つてくるんですけど、非常に安いんです。これ一個やったら1円ですよとか、1000個で1000円とか、そういう状態の中で、なかなか工賃を上げることができないんですね。特にB型事業所。特性に合った作業や安定した受託作業の確保が難しいということで、細かい作業が得意な人がいれば、力仕事が必要な人がいるが、力仕事が必要な人でも細かい作業をしなければならぬ。例えばお正月の切り餅のパッケージをつくる作業があったとして、夏から冬までは忙しいが、正月を超えてしまったら仕事がない。非常に安定性がない。時々ものすごく暇な時期ができてしまい、何か仕事はないかと求めているような状況がある。受託作業の確保が難しいというのも課題の一つです。精神障がいの方は体調が安定しないことがありますが、真面目で責任感が強い一面を持っています。発達障がいの方はその人が得意な作業に就く事で高い作業効率が期待できます。知的障がいの方は繰り返しの指導が必要なこ

ともありますが、素直に支持を受け入れることができます。共通として、一旦習得すると継続能力に優れていますということで、自分たちでは飽きてしまうようなこともずっとやってくださる方が多くいらっしゃる。

農福連携は福祉と農業の繋がりです。福祉側の作業の幅を広げたい、これは農業からしてみると作業の種類が豊富である。作業の草取りから高度な技術を要する作業まである。その中で切り出しができる。すると福祉のニーズに繋がる。福祉は10代～50代までの年齢層が多いが、農業は若い力が欲しい。これによって繋がる。障がい特性においても、その人に合った作業の切り出しが可能で、これによって繋がっていく。また、コミュニケーションが課題の利用者も土や作物との作業になるためストレスなく働くことができる。以上のことから、なぜ農業なのかという点において、それぞれのニーズと、それぞれの特性がうまく相性がいいということで、全国的に言われている。

真っ白な状態から始めたので、農家を適度にアポイント取るわけにもいかないですし、あまりの数の多さにびっくりして、どうすれば効率がいいかを考えたときに、ハローワークに求人を出しているところにあたりました。人欲しいから求人を出すわけで。したがってハローワークとの関わりはありました。あとはJAです。JAの総会で周知活動をしていましたね。あとはやはりね、中心部から外れていくと自治会とか町とか村とかあって、定期的にみんなが集まるような機会があるわけですよ。そういったところで制度の説明をしてきました。「みつばち」^{注1)}の力も大きかったですよ。障がい者雇用に対し志を持っている、気持ちを持っている関係性。みんなが自然に集まるというか、ちょっとでも触れるとそこで繋がっていくんですよ。お互いに協力しながら、情報交換しながら一緒に歩いていく。そうするとだんだん人の数が増えていっ

て、現在、ある人に問題が降りかかっても相談して、「この問題に関してはE先生に訊けばいいかな、この問題に関してはこの社長に訊けばいいかな、これは学校に訊けばいいかな」とかができ上がってきたような気がします。

2. お互いのメリット

最初に戻ってお互いのメリットについてです。まず福祉側において、施設外で働く経験、就業への訓練において、箱折りなど建物の中でずっと内職をしていくということは、お日様に当たらないし、体力もそんなに使わない。しかし農業で働くことによって、外で太陽にあたるだけでも体力は使う。作業をする、汗をかく作業のため、将来社会に出たときに建物の中でずっといるよりはもちろん体力がつく。あと、必ず外に出るということは朝行ったら「おはようございます」から始まり、「この作業はどうしたらいいのかな」という時に、やはり農家さんに訊きます。「この草は取っていいですか」「この草は残しておきましょうか」といったことを訊きます。

精神面のケアにおいて、建物の中で作業するよりとてもロケーションがいい。角田山のふもとが畑だった場合、角田山があり、空は青空で周りは緑ばかり。精神の方は「非常に気持ちがいい」とおっしゃってくれる。また精神の方は夜悩んでしまい、眠れない方がいらっしゃると思うが、日中汗を流して、体力を使い、肉体労働をする。すると自然に夜眠くなるという声を生で聞いている。寝ることができてサイクルが良いときに戻っていった。これによって、自分の精神が安定してきたというお話をいただいた。

社会適応力アップでいうと、外にでるといろいろな経験をする。これらは一つも無駄にはならないと思う。もしかしたら行く道中に交通渋滞に巻き込まれるかもしれない。その時に職員は農家さんに電話をして、「申し訳ございません。現在、混んでいて、10分ほど

遅れそうなのです」と連絡しますが、これも傍で聞いているわけですね。社会に出たときにやらなくちゃいけないこと、社会勉強のところで適応力アップが期待されるところで。

現在まで農業に就職することは本当にまれにしかなかった。障がいを持つ方が農業に就職するということはゼロに近かった。特別支援学校の生徒にしても、就労支援施設で働くB型A型の方にしても、選択肢としてたくさんあるが、農業は対象外だった。しかし、100人障がいを持つ方がいたら、1人2人農業に適正のある方がいらっしやるはず。そのような方の選択を増幅できるメリットも出でくるわけです。適性があるかないかについても施設外就農であったり、農業体験であったり、そういったところでやってみて、好きか嫌いか、楽しいか楽しくないかを自分でも感じることができるし、支援員や先生も評価できるわけです。この前特別支援学校から20人来られて、やる前に「将来、農業に就職したいと考えている人」と訊いたら1人だけしか手を挙げなかった。終わったあとに訊いたら12人が手を挙げました。やってみないとわからない。わからないから選択肢になっただけで、やってみたら「実は楽しいぞ」というかたもいらっしやるということです。あと、仕事後に時々いただくB級品のおみやげも楽しみのひとつのようです。

障がい者支援施設B型の事例ですが、平成26年度に月の工賃が全国平均で14,838円。安いですよ。時給にすると100円～150円の世界なんですよ。ですから、もっと農と福が絡みあって、農というのは労働力が体、肉体労働でいくわけですから、そんな安いお金でやらせません。現在、市の助成金の関係もあるけれども、平均500円で、市内51件施設と農家を繋いでいます。労働力のアピールということで、今まで農家さんは「障がい者？何、農業なんかできんばさ」というようなことを

言っていたが、実際に現在、51件の施設外就農をしてみて、農家さんから聞かれるのが間違いなく「いやー、意外とできるんだね」と。どこの農家さんも言うてくださいます。ですからイメージよりも労働力はあるよということを知っていただいた証なのかなと思います。

やりがいですけれども、農業は種を植えてから収穫するまで期間があるのですが、その間ずっとお手伝いをしていくわけで、小さな芽からトマトがなるまでキュウリがなるまで自分たちが草取りをしたり水やりをしたりすることで育っていく喜びを、農家さんの喜びの一つなんでしょうけれども、それを分かち合えるというか、やりがいに繋がっていく。障がいのある方はなかなかこのような経験はない。自分が手掛けたものがどんどん育っていくって商品になっていく。経験されたことがある方はなかなか少ないと思うのですが、農業をやることによってそれが体感できるというところなんです。

今度は逆に農業側。労働力の確保、これはもちろん手伝いに来るわけですから、確保できます。何よりも良いのが、冬場仕事がないときは、収益がないわけですから、年間で人を雇用することはできないんですね。忙しい時だけ手伝いに来てくれるというところがメリットとなっている。実際に農家さんもそのように言ってくれている。人件費ですが、現在は新潟市の制度を使ってきっかけづくりとして助成金でやっているが、人件費を抑えて人を使える。例えばシルバー人材さんに頼むと人件費は一人1時間1080円くらい取られるわけです。だけど障がい者を使えば、現在は持ち出しなしで助成金の範囲内でやっているところもあるし、一部を自腹きっているところもあるし、人件費を抑えられるメリットがある。農作業の計画化というと、今までベテランの農家さんは「5月になったらこれやろうか」「6月になって雨降る前にこれやっ

てしまおうかな」などと体で覚えてしまっている部分があったんです。しかし、現在、私が繋いでいる施設のお手伝いしている方法としては「火曜日10時に毎週来ますよ」と言うと、農家さんも感覚だけでやっていると仕事を用意できない。だけど、農家さんが計画性を持ってやってもらうことで、スタンバイするという意味では作業が計画化した、と言うんですよ。「あの子たちが来週の火曜日に来るから、現在、週中にこの部分を終わらせて、この部分をやってもらおうか」とかこのように計画性が出てきたということで、農作業が計画化したという声を聞いています。

農業の方面にももちろんやりがいがあります。例えば草取りや小石拾いは農業のプロでなくてもでもできるわけです。それを障がいを持つ方がやることで、農家さんは自分の時間ができるわけで、そうするとプロにしかできない難しい作業をやったり、新たな品種をつくらうかなと思ったり、新しい顧客をつかもうと思って営業開拓をしたり。そういった時間に使っていただくことで、どんどん良い収入を得るためのやりがいのところで繋がっていくことができるわけです。

3. 農福連携を促進するネットワーク

二つ目のキーワードで、助け合うことで生まれるネットワークということで、今までは農家さんとJAとの繋がりがしかなかった、直売所との繋がりがしかなかったものが、福祉が絡むことで障がいのある方のご家族、授産製品、福祉法人が運営する店舗とか、企業、レストラン、喫茶店、いろいろありますよね。行政も絡んでくるわけです。これだけ人の繋がりができるわけです。どうなるかということ、農家さんはJAに出していた分の一部を企業のレストランに直接送ると。80円で売っていたものが120円で売れますというメリットが生まれるわけです。「人脈から生まれる新たなマーケティング」というところでできていく、というわけです。もしかしたら学校給食

に使っていただけるかもしれない。社会福祉法人は、特別養護老人ホームなどを運営しています。そこで給食を出していますよね。老人ホームの給食などにも使っていただけるかもしれない。パンを作っている福祉事業所もあるし、お菓子を作っているところもある。こんにゃくを作っているところもありますよね。その人たちが市場やスーパーから材料を買ってきていると思いますけれども、繋がることによって、施設と農家が直接やり取りができればいいな、と。このようにこっちは高く売れるし、買う方は安く買えるし、というネットワークが生まれてくるというわけです。

ただ、障がい者が農業で働くということになったとき、福祉の人たちは農業に関して素人さんなんですよ。で、新潟市ではこのような施設（あぐりパーク）があります。ここで専門の支援員がマンツーマンで3人の利用者に優しくゆっくり丁寧に教えてくれてます。非常に大好評で現在、今年の子定はもう満杯になってます。機械を使う作業もレベルの高い方に教えてくださってます。大きくなった頃にここの畑には例えば●●っていう事業所だったら「ここは●●の畑！」みたいにして看板立ててくれてね、いつでも見に来れるようにしてくれてます。あぐりパークの隣には農業活性化研究センターもあります。これは実戦訓練ということで、現在、今度はこっちは、指導員がさっきマンツーマンでついでましたけど、もう野放し状態というか、自分たちで全部やるという感じで、指導員がつかないです。作業の指示は出すけどすぐいなくなって、自分たちでやらなくちゃいけない。こういう訓練をやっています。

4. 新潟市の就労支援施設における施設外就農

施設外就農ということで、現在、累計で51件になりました。新潟市が「謝礼金」というものを出しているんです。農家と福祉施設が請負契約を結んで、労働力を提供して、作業

報酬を支払います。そういうことが行われると市役所の方から1日3,000円農家さんに振り込まれます。大体の農家さんはその3,000円は自分のポケットに入れなくて、全部工賃としてこっち（障がいのある方）に支払っているのが現状です。ただし、これには条件があって、月に5日以上ここの作業をしてくださいということ、1回あたり2時間以上作業してくださいということ、3名以上行かなくてはならないです。3名で2時間ですから、1日6時間分の給料を払うわけです。3,000円です。そうすると $3000 \div 6 = 500$ 円、先ほど500円ってでたと思うのですが、それがベースになってます。500円なんてもらったことない、時給500円もらえる作業なんてしたことない利用者さんはすごく喜んで、ある事業所では3人の枠をめぐって、「明日の作業、農業行きたい人ー？」って訊くと、8人9人手を挙げるそうです。ですから希望者を順繰り順繰りこう回しながら、順番に連れていっていると。人気の施設外就労となっているわけです。

K福祉園さんでは、レタスの水耕栽培のお手伝いをしています。私がですねこのレタスを、Oっていう新津駅前にあるレストランを紹介しました。毎週5キロずつOにレタスが行っているんです。土で作っていないので、虫がつかないです。レストランではサラダに使いたいんだけど、土臭さがなくて、えぐみもなくて、さっぱりしたレタスなんです。なので、サラダに非常に合う、ということです。植物工場でこの中は24℃で一年中管理されているので、夏場でも冬場でも安定したレタスの供給ができるわけなんです。レストランの方もなので大喜びなんです。Oのシェフの方もおっしゃってくれていたんですけども、非常に助かっているという。週に5キロずつレタスを運んでいるということは、これでは全然間に合わないの、農家側としては棚を増やしたわけです。そうすると仕事が増

えますよね。そうすると障がい者の仕事が増えるわけです。拡大していくと労働力がなくなっていきます。だから、障がいのある方の働く場も増やしていくというところで、どんどん大きくしていきたいと思ってます。障がいを持つ若い女性に人気だったのは、花、お花屋さんの作業です。ポットに土を入れたりして。

農福連携を受け入れていない施設が、農福連携をどのように感じているのかですが、そのような施設でも興味はあるみたいですよ。興味はあるけれど、現在、持っている仕事がこなすのに精いっぱいという事業所が多いみたいで、やりたいけどできないってことかな。古ければ古いほどこういう状態です。なぜかという、何十年も決まった仕事をやってきたわけですね。企業とがっちり繋がっているわけで。ここで「ごめんなさい、さようなら」ってしたくないんでしょうね。安いのわかっていても、人脈を壊したくないということでしょうね。古ければ古いほどそういうところが多いです。施設としては（田んぼや畑が）近いところが良いと言うんですよ。施設から近い方がいいというのは移動手段の関係です。だいたい9時半から3時っていう施設が多いじゃないですか。間にお昼があるわけですね。そうすると一番望むのは9時半から11時半まで2時間仕事して、30分で帰って昼食、1時から3時まで仕事っていうようなパターンを望んでいますね。逆に、農家側は朝早く来てくれって言うんですよ。農家さんは朝早い涼しいうちに仕事したがるんですが、福祉事業所のオープン時間の関係でそれができていません。夏場ね、10時から12時、本当に死んじゃいますもんね。草取りとか袋詰めとか簡単な仕事をしてほしいという農家さんが多い、それがニーズですね。

5. 佐渡への提言

佐渡の話なんですけれども、特別支援学校の先生から、「佐渡には先祖代々の土地を大

切に大切に思っているご年配の方等大勢いらっしゃると思います。耕したくてもできない土地を、特別支援学校の生徒が関わるようになったらとおっしゃってくださる農家さんがいます」と聞かされました。地域で感謝されて、高齢者の大きな生き甲斐になるのではないかと。「すぐにどうにかなるとは思ってはいませんが、何年も継続して取り組んでみたいテーマと考えています」ということで、佐渡からのご提案がありまして、佐渡まで話に行ってきました。

佐渡市の人口は57900人。そのうち働いている人は31000人。第一産業、農業と漁業だけで7000人だそうです。全体の22%。それを新潟市で考えると、40万人の2万人で5%しかいません。佐渡の方が農業に関わる方が割合としては多いんですね。ということは割合からして農業に関わっていける可能性が高いということです。ただものすごく人口が減っています。その中で農業をやめていくという方がたくさんいらっしゃる。歳もあるし、輸送費、搬送費もかかるし。ということでやめる方がいっぱいいらっしゃるそうです。

佐渡でどういう風に進めていけばいいかという、まず市の協力が得られるか、予算を組めるかで、行政の協力があれば大きく前進します。例えばさっき説明した助成金とか謝礼金があれば大きいです。あとは専門に動ける機関、人員の確保なんですけれども、例えば社会福祉課の誰々が兼務でこの事業を進めますといっても、全然進まないと思います。やはり私らのセンターみたいに専門で動ける人がどっぷり浸かって全力でやっていくということで、兼務ではなく専任でおいてください、と訴えてきました。

あとは学校や就労支援施設が動けるかどうか。やはりこの事業に賛同してくれなければ学校も施設も動いてはくれませんので、こちら辺は理解いただいて、いきなり農業未経験の人がいきなり農業に雇用されることはまず

ありませんから、施設ぐるみで施設外就農をやったり、学校であれば農業体験をしたりとかしながら農業に近づいて雇用していくというようなことを学校も施設も協力していただきよ、ということを書いてきました。

佐渡市って島ということで特別な場所なんです。例えば新潟だったらこの農家さんは無農薬でやっていますよ。でもすぐ隣の農家さんが無農薬でやっていなかったら、どうしても純粹に無農薬と思えないです。流れるし、飛ぶし。でも島全体でそれをやればすごいもう安心感があります。トキもいます。タニシのためにも島全体で薬品は使わないんだという風にしていくと、佐渡は無農薬ブランドとして評価が上がるのではないかとことも踏まえてお話してきました。

漁業、林業とのタイアップということなんですけれども、農福連携でできた野菜を漁業を絡めるということになったら、二次加工のところになるのですが、例えば漁業の海藻を…ね、現在、健康ブームですから、海藻を使う。あとは漁業ではないけれども佐渡の脇って深海があって、海洋深層水がとれるんです。簡単にとれるそうです。ある所へ行くと蛇口をひねればいただけるというような環境だそうですが、そういうものを使った例えば漬物ですとか、そういったものを作って、農福連携だけでなく、農福漁林商連携をしていただければ、佐渡オリジナルの農福連携ができるのではないかとお話ししてきました。

あとは商品が必要です。「収益の確保」というのは、継続していくにはお金がどうしても必要なんです。人を雇用するわけだし、人を使って動かすわけですから、お金が必要なんです。じゃあそれを生むものは何かというと、「農福連携の商品」です。他の市町村にはない商品で、付加価値のついたものをつくっていただいて、それをちゃんと販売して収益を上げて、より長い間農福連携が継続できるようにそういった仕組みづくりをしっかりと

行っていたかないと、最初の勢いだけで終わってしまいますよ、と。ずっと続けていくにはお金が必要なんですよ、と伝えてきました。

「じゃあまずは何をしましょうか」というところなんですけれども、まずは施設外就農を行いながら、農家さんとの関係をつくりましょう。「ただ話すだけでなく、実際にやりましょう」ということを伝えてきました。例えば、カブをつくっている農家さんがいました。カブを福祉事業所で買います。そして福祉事業所としては海洋深層水で漬物を作ります。それを商品として売っていきます。プランの実行にあたっては行政からの協力をいただきます。補助金とか出ます。例えば芋農家さんがあったら、干し芋にするのは福祉事業所でやりますよ、と。じゃあ、乾燥機が必要ですね、と。そうしたら行政の補助金で福祉事業所に乾燥機を置いていただければいい。それによって初期投資を抑えてできますから、とお伝えしてきました。

佐渡といえば、観光、漁業、林業、加工なんですけれども、その中で農福連携が繋がっていける部分としては、観光が一番大きいと思います。ホテル、旅館、民宿とかの農産物を、とったやつをすぐに届けるということ、契約を結んじゃってね、市場で買うんじゃなくて農家が直に持って行って、それを使ってくださいという契約を結ぶこととか。

魚介類を使った農産物加工品づくりも考えられると思います。魚と野菜をうまく調理したものがよくスーパーに売られているんですけれども、それを福祉事業所で作ってみませんか、とか。海藻でどこかの薬品会社と提携して、海藻を加工する前の段階、例えば乾燥させるところまで福祉事業所が行って、薬品会社に売いませんか、とか。あと、網、水揚げ後の処理とか。この魚はこちらに置いておくとか。そういった仕分け作業とかも手伝いませんか。あと牡蠣を外すような作業も手

伝いませんか、と。福祉でできることを探してきましたよ、とお話してきました。

林業では竹炭を書いたんですけれども、竹を燻してつくるものなんですけれども、よく消臭剤や消臭ポットに使われるものもあるし、あとは畑に撒いて肥料として使うんですけれども、これも福祉事業所で初期投資が全然かかりませんから、竹林があるなら近くでやりませんか。

6. 六次産業化へ

佐渡の加工品では海洋深層水を使った漬物づくり、おけさ柿の加工を福祉事業所でやりませんかというような、これは例として伝えてきたんですけれども、新潟市は新潟市で、つい先ほども六次産業化プランナーのAさんという方とVという事業所で会っていました。現在、新潟市の場合は例えば大豆農家さんだったらCさんと提携をして、納豆をつくりませんか、ということを実際にやっているわけです。この前22キロ持って行って新聞にも取り上げられましたけれどもこういう風にやっています。あとは豆腐をつくったり、きな粉をつくったり、あとは「フムス」っていう中東の方ですね、大豆ゆでたやつをすりつぶして、ペースト状にしたものにバジルとかオリーブオイルとかニンニクとかを混ぜて、簡単にいうと洋風の味噌みたいな感じなんですけれども、そういうものをですね、温野菜のディップに使ったりする。これをつくりませんかという風に勧めたりとかしていますし。

「就労支援機関と農家についてどのように調整等を行っているのか」ということですが、ある西蒲区の葡萄農家さんで、「Kさん、スーパーマーケットLと直売所しか売るところがないんだけど葡萄がかなり余りそうなんです。何か売る方法わかりませんか」と言ってきて、私かつては営業職だったので営業のやり方を伝授してきたんです。説明してきたのは「こんなに美味しい葡萄だったらパッケージちょっと綺麗にして贈答品で使ってもら

えばいいじゃないですか」ということ。この農家さんは葡萄があふれる地域の中で葡萄を売ろうとしていたわけですよ。そんな葡萄畑の中で葡萄が売れるわけありませんよね。で、私が言ったのは三条市の方で中小企業いっぱいあるじゃないですか。必ずお礼に行くときも謝りに行くときもお中元もお歳暮も何か物を送るわけですよ。しかも地元の物を遠方の方に送るということは非常に合っているということです。これは私の業務外という心配があったので、市の方に相談したのですが、農家さんが儲かるということは障がい者の方が働く場をつくることになると。障がい者の方が働く場をつくるという活動もしなくてはいけないので、農業の活性化も私の仕事のかなと思っております。

私の仕事は農家をもっと商売上手になってもらうための指導、これも含まれると。福祉事業所が農福連携の授産物をつくったときに、ただ店頭で来る客を待って売るのではなく、もっとルートに乗ったところに自分からおいでください、Y苑に置いてくださいとか、綺麗な花を、ブーケをやっているところであれば、結婚式場のBに持って行って、こういうものを私たちはつくっているんで使ってくださいなどと、こういう仕掛けをして、農業と福祉が儲かる仕組みをつくっていくのも私の仕事かなと思っています。農業の方は儲かればそれだけ障がい者を働く場に使ってくれるし。福祉事業所が働きに来ていればそれだけその工賃がアップすることになるんですよ。

7. 助成金以後の支援：まとめにかえて

助成金があったから私たちは51件もできたんですよ。これがなかったら非常に厳しい状況だったろうと思います。その1日3,000円のお金が繋がるきっかけになってくれたんです。私ガリストにある中で連絡して、「すみませんA農家さん、実はあの、障がい者の方がお手伝いに行きたいんですけども使っ

ていただけませんか」と言って、「金どうすんだい？」って話になります。そこで助成金があれば「市の助成金がありまして、ご負担が少なく使っていただけるんですけども」とって言うと、だいたいまあ、話だけでも聞いてみようかな、ということで説明しに行って、すぐ決まっちゃうんです。その助成金がなくて、全部自分の負担で出してくださいということだったら、これね、たぶん1/5くらい。本当に理解のある農家さんじゃなとやってくださらなかったような気がするんですね。何もない中でくっつけようとするときのきっかけとして使えたかなって感じですね。

農業系の雇用の難しさということで、去年やってみたんですけども一人も就職させることができなかつたです。どんなに大きいところにアプローチしてもダメでした。新潟は特別そうなんでしょうけど冬場の仕事がないということで。人1人雇うと少なくとも年間300万円くらいかかりますよね。その300万円を現在、この農家で売り上げている作物+300万、しかもそれが粗利益です。300万儲けるためのものをやろうとするとすごく大変なんです。現在家族で、父ちゃんと母ちゃんと息子でやっているからなんとかなる人件費を決まった時期にかからないからできるけれど、もう一人300万円稼ぎだそうとすると農業では非常に厳しいんです。ものすごく上手くやる農家さんもありますけれども、なかなか稀です。そんな中で人を雇ってくださいというのはなかなか難しかったです。現在、年に入って1件雇用が決まりそうところがあるとは思いますが、ようやく1件というところで、非常に厳しい。全国から農福連携を取り組んでいる先輩とかに来てもらって話を訊いているんですけども、やはり全国的に厳しいと言っています。

農福連携を進めるには地域ごと、佐渡には佐渡のやり方で、新潟市には新潟市のやり方での新たな仕掛けが必要なんです。関西の事

例をここでやろうとしてもできないのです。参考にはするのですが、地域ごとでやり方を考えなくてはならない。五泉市でやるのであれば五泉市のやり方を考えなくてはならない。五泉市は新潟市より雪が多いので、新潟市と同じやり方はできないわけです。得意な作物もみんな違います。それぞれの場所でその時勢を土地柄に合った方法を誰かが考えてやっていかななくては厳しいというのが現状です。田んぼがあるんだけど、もう75歳だし、もう人に預けたいというところが、佐渡もそうですし、新潟市もそうなんですけれども、いっぱいいらっしゃるんです。もう自分たちは歳で、自分たちではできないから人に委託しようと。障がい者に委託してもらって、委託契約で。でもこの人たち素人だからこのDさん（委託した側の農家さん）には一応監修してもらいます。それで、この人機械を持っています。コンバインとか田植え機とか持っていますから、それはもちろん自分の家の仕事なんだからもちろん提供してもらって、肉体労働の部分だけここでやると。そうすると、この農家さんは、この仕事はもうやめようかと思っていたけれど、5年先、10年先まで農業を延伸できるメリットがあります。耕作放棄地にするとお金をとられます。でもそれをしないで、ここで作物をつくって収益を上げながら、自分（農家さん）は体を使わず、指導の立場で動くというような、そういった仕組みをつくっていくことが大事なのかなと思います。

助成金は2年間っていう期限があるんですね。1農家につき2年間。それが終わった時には、「はい、さようなら」というのはあまりに悲しすぎるので、何か助成金がなくても繋がっていけるような仕組みをつくっていかなくてはならないと思って今年4月からやっているわけで、それがこういうものです。それぞれの地域に合った農家に合った、それぞれの福祉施設、農家の組み合わせの中

でできる何かを探していく、そしてお互いメリットが出ることを提案して、実践してもらって、助成金が無くても太いパイプのまま残ってもらおう。そうするとこれをやることで農家さんにメリットがありますから、福祉事業所とずっと繋がってきたいと思うわけですよ。そうすると忙しいときにお金払って労働力として来てくださいというようになっていくし、商品が利益を生んでくれることもあるので、利益の分だけあなたの施設で使うから工賃の分だけ働きにきてね、というところもあるし。ということで、当面は「仕掛けをつくっていく」これが助成金制度後の対策になります。

文献

- 1) 新潟市ホームページ 新潟市農林水産部 ニューフードバレー特区課. 「新潟市革新的農業実践特区」. <<https://www.city.niigata.lg.jp/shisei/seisaku/kokkatokku/tokku/index.files/tokku-pamohlet1.pdf>> 閲覧日2016年12月1日.

注

- 1) 「みつばち」とは、新潟市の障がい者雇用企業ネットワークで、企業の中の障がい者を雇用している、または障がい者を雇用しようと考えている人たちの集まりである。「みつばち」の中にはパン屋、給食やってる企業、店舗を持っている方もいる。

謝辞

本研究は、平成27年度採択科学研究費助成事業若手研究（B）「障害者雇用を可能にする総合的支援システム構築とコーディネーター役割の理論化」（代表：海老田大五朗）の成果の一部である。インタビューの文字お

こしを手伝いいただいた長岡舞氏に感謝申し上げます。また、インタビューに協力いただいた菊池雅幸氏と、本稿を添削いただいた新潟市役所福祉部障がい福祉課員に記して感謝の意を表したい。